

結城昌治

新時代



志ん生一代（下）

昭和55年10月20日 第1刷発行
昭和58年6月10日 第2刷発行

定価 440 円

著 者 結 城 昌 治

発 行 者 初 山 有 恒

印刷製本 凸版印刷株式会社

発 行 所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地 5-3-2

電話 03(545)0131 (代表)

編集＝図書編集室 販売＝出版販売部

振替 東京0-1730

©SHOJI YUKI 1980 Printed in Japan
0193-260234-0042

志ん生一代

(下)

結 城 昌 治

朝日新聞社

表紙・扉 伊藤 鑛治

目次

どん底

7

業平橋

63

代わり目

142

満州ご難

215

火焰太鼓

268

晩年

312

美濃部孝蔵年譜

346

あとがき

353

文庫版あとがき

354

解説

山田洋次

355

志ん生一代
(下)

「週刊朝日」昭和五十二年二月十八日号～五十二年九月十六日号掲載

どん底

一

明ければ昭和二年（一九二七）、孝蔵は数えて三十八歳になった。六月の誕生日がくれば満三十七歳である。彼が芸の目標にしている円喬は、同じ年齢の頃すでに名人と呼ばれていた。

しかし、孝蔵のほうはそうはいかない。頼りにした権太楼は家賃を踏み倒して大塚の芸者屋へ行きっ放しで、孝蔵は松の内の七日間が過ぎると待ちかねたように追い立てをくった。家賃を半年も払わないのだから当たり前だった。溜まった家賃は棒引きにするから出ていってくれという。それでも夜しか家にいない孝蔵は平気だが、子供の守り^もをしながらマッチのレッテル貼りの内職をしているりんは、毎日のようにやってくる大家の催促に耐えられなかった。

已むを得ない。

今度は万橋^{まんきつ}の世話で幡ヶ谷へ転居した。新宿から京王線で笹塚より一駅手前である。六畳一間きりで、軒なども傾きかかっているが、その代わり前家賃は安くて敷金も取らなかった。

一方、落語協会のほうは小さんが引退の意をあらわして三升家小勝が後任会長にきまると、小勝と柳家三語楼という人気者同士の反目が表面化して、三語楼は落語協会の旗と看板を持って飛び出してしまった。これが俗にいう三語楼協会で、弟子も多くて勢力があったのである。

旗と看板は小勝より実権を握っていた講談の一龍斎貞山が取り返してきたが、飛び出されたほうは会長の小勝のほか三代目小さんや八代目文治の一門などが残っていた。

三語楼協会のほうは三語楼が会長で金語楼が副会長、これに一門を率いて睦会を離れた先代円生が顧問に加わった。こっちも錚々たる顔ぶれである。

柳家金語楼はのちに喜劇俳優として芝居や映画の人気スターになり、晩年はテレビでも活躍して昭和四十七年七十一歳で他界した本名山下敬太郎だが、父は三遊亭金勝きんしょうというあまり売れない落語家だった。そして父について寄席へ出入りしているうち、出番がきてもやってこない芸人の穴埋めに「出てみないかい」と言われ、押し出されるように高座へ上がったのが初高座である。「あっちから清兵衛さんがきて、こっちからも清兵衛さんがきました。ぶつかって喧嘩になり、二人ともコブができましたが、喧嘩両清兵衛（両成敗）、コブコブ（五分五分）ですみました」という小ばなしをやったが、敬太郎はこのときまだ六歳、客席は拍手喝采かっさいだった。つづいて緋かすりの着物の尻を端折って「かっぱれ」を踊ったら、また大受けで投げ銭（祝儀）が飛んだ。

小さな落語家の誕生である。

翌日から父の師匠二代目金馬の弟子にされ、三遊亭金登喜きんときという芸名をつけられた。

この金馬は、落語だけでは食えなかった頃お盆に彫り物をして売っていた。それで俗称がお盆屋の金馬、興行師の才覚があって日本じゅうをまわり歩き、旅先の人気で彼にかなう者はいなか

った。一座の全員に浜縮緬ちりめんの紋付きを着せ、金ぶちの帽子をかぶらせて町まわりをするという賑やかなやり方で、大阪堀江の六人斬りで有名になった両腕のない芸者松川屋妻吉を呼びものにした。妻吉は両腕なしで踊ってみせ、口にくわえた筆で絵を描くなどますます評判になったが、敬太郎も「天才少年三遊亭金登喜」で売り出されたのである。

しかし金登喜の芸はしょせん子供の愛嬌にすぎない。人氣が長つづきするはずはなかったし、師匠の金馬は旅まわり専門で年に一月ひとつきくらいしか東京にいないので、父が三語楼に頼み、預かり弟子にしてもらった。

だが、彼の落語はいっこうに売れなかった。落語家というより踊りが売りもので、お盆や扇を使ってやる曲芸の踊りが受けたものの、それも飽きられて一時は活動写真の弁士になろうとさえした。そしてふたたび寄席に戻ると、売り出したいいっしんで奇行を演じ、お盆を持って踊りながらガス灯のマントルを叩っこわしたり、ナイフで柱を削ったり座蒲団を破いたりした。そんなことをやれば客はおもしろがるが、もちろん芸とは関係がない。寄席から締め出しをくうことも再々で結局は評判をわるくしただけだった。

やがて大正九年の暮れ、彼は徴兵検査に合格して朝鮮の羅南に入隊した。

ところが、除隊間際に紫色の斑点が全身にできて高熱を発し、斑点も高熱も数日で直ったが、そのとき飲まされた薬のせいで頭がきれいに禿げてしまった。

彼のトレードマークのようになった頭はそれ以来である。

しかし、当時はトレードマークどころではなかった。高座に戻ることは戻ったが、もう色っぽい踊りは踊れなかった。次第に寄席を遠去かり、芳町の芸者屋のおかみに可愛がられて毎日を送

るようになった。

だが、兵隊落語を思いついたのはそんな頃だった。遊びのつもりで座敷に呼んだ春風亭柳昇（のち八代目朝寝坊むらく）が自分の軍隊体験を落語のようにこしらえて、

「輜重輸卒が兵隊ならば
しちようゆそつ

蝶々とんぼも鳥のうち

ナツチョラン

ナツチョラン

と唄入りでやったのである。

日露戦争の従軍談を得意にしていた左楽の場合は兵隊落語といえないし、柳昇のはなしも落語というより漫談だった。

しかし、金登喜から小金馬、金三きんざと改名していた山下敬太郎は、この柳昇のはなしにヒントを得て兵隊落語を考え、大正十二年の震災前後からばりばり売れてきた。それまでは、兵隊落語のヒントを与えた柳昇に商人の若旦那と思われていたほど落語界でもろくに知られていなかったのである。

だが、いまや金語楼は映画にも出演し、師匠三語楼をしのぎかねない人気看板だった。

二

三語楼門下では、ほかに小三治こさんじ（先代正蔵）がいた。現・林家三平の父だが、高っ調子の陽気な語り口で「正蔵でございます、すいません」という台詞はそのまま息子に引き継がれている。三

の輪の桶屋大工の四男で、天狗連から三語楼に弟子入りして初めは柳家三平といった。二つ目時代から派手に売れだして柳家小三治と改名、「源平盛衰記」を戯画化した「源平」や「相撲風景」などが得意で客を爆笑させていた。昭和二十四年に五十五歳で亡くなったが、孝蔵より四つ年下である。

若手の真打では柳家梧楼、のちにリーガル千太とコンビで東京の漫才界をリードしたりリーガル万吉である。

それに柳家金語(現・古今亭志ん好)、芸名が金語楼とまぎらわしいが、もとは金語楼と同じくお盆屋の金馬の弟子で三遊亭金魚といていた。大正十五年に師匠が死んで三語楼に預けられたが、落語のほか三味線がひけて、音曲師としても立っていける芸人だった。

それから例の権太楼。

色物では柳家三亀松も三語楼の弟子だった。深川の木場(材木置場)で働く川並(役師)の長男で、彼も小学校をでると川並になった。印半纏に縄の帯をきりっと締め、川に浮かせた材木の上を走りまわり手鉤で材木をさばく仕事だが、辰巳芸者の粹に対して、川並の心意気はいなせといわれた。道楽に三味線や清元をならうことは、博奕をおぼえるのと同じくらい普通だった。

しかし、彼の稽古事は道楽の域を越えた。湊家亀松と称して天狗連に加わり、ついには本業を放り出して洲崎の遊廓を流すようになった。その頃の綽名がチャラ亀で、口から出まかせの冗談に妙を得て幫間の弟子にもなった。都々逸でもさのさ節でも、声がよくて節まわしがよかった。おまけに気っ風がよくて男前もよかった。これで女に堅ければ別だが、堅いくらいなら芸人になるわけがない。

幫間が土地の芸者と深間ふかまになることはご法度はつとである。

彼はいつも女でしくじり、そのため洲崎から神楽坂、富士見町、芝浦という具合に転々としたが、しまいにはどこへも出られなくなってしまった。

そこでまた流しの芸人に戻り、土手組の一座で稼いだりして三語楼の内輪になり、三亀松の名をもらってからたちまち人気者にのし上がった。昭和二年は彼が売れ出した最中だった。

三語楼一門はほかにも多彩な芸人がいたが、金語楼の直弟子では柳家金洲がいた。のちのリーガル千太である。

彼は神田の本屋の店員だったが、毎日のように神保町の寄席へ通って、金語楼がでると「兵隊！」と声をかけていた。そのうちどうしても金語楼の弟子になりたくて、まず下足番に席亭を紹介してもらい、席亭から金語楼に頼んで内弟子（住み込みの弟子）にしてもらった。それが大正十五年九月、山下敬太郎が金三から金語楼になって燃えてきた盛りだった。

円生の一門も顔ぶれが揃っていた。円生はすでに大看板だし、でっぷりと太って風格もあり、十八番の「首提灯」や「三十石」などは円生以外にやる者がいなくなったほど上手うまかった。

円蔵（現・円生）は金語楼が金登喜で高座へ上がった頃から、彼も六歳で豊竹豆仮名太夫と名乗って義太夫の初高座をつとめている。そして十歳のとき落語家に転向し、品川の円蔵にも義父の円生にも可愛がられ、孝蔵に較べれば遙かに恵まれた境遇で落語家の道を歩いていた。

円窓は円生の実弟、鯉楽りくらく（のち円晃）は現・円生の異父弟だが、それに音曲おんきょくの万橋、皿まわしの一柳斎柳一、常磐津の文字妻、前座から二つ目になったばかりの若蔵など、円生一門だけでも十人ではきかなかった。

これらのうち、金語楼、三亀松、金語、金洲は四人とも明治三十四年生まれで、二十六歳になるやならずの若さだった。円蔵は二十七、若蔵にいたっては十九である。

孝蔵は自分の年齢を考えた。

「こうしちゃいらねえ」

思わず呟いた。

「出かけるの」

りんがきいた。内職の手を休めないで、返事を期待しない聞き方だった。

孝蔵はごろんと横になり、また名前を変えようと思った。

三

柳家東三樓あらため柳家甚語楼。じんごろう

いったい何度改名したのか、もう自分でも思い出すのが面倒である。

しかし、小西万之助の延生は兵隊寅といっしょに数えてみたという。

「いい加減にしなよ。名前なんか変えたってろくなことねえし、みんなからもろくなことを言われない。今度で十二回だ」

「そんなになるかい」

「最初が朝太じゃねえか」

「それくらいは憶えてる。万ちゃんが清朝でさ、御徒町おかちの豆腐屋の裏の、ひでえ二階にくすぶっていた。キツネ馬の飛ばっちりで、指をツメさせられそうになったのもその頃だった」

「そういえば、キツネ馬はどうしてるのかな。噂を聞かねえか」

「あいつは旅へ行ったきりだ。円生さんところにも音沙汰がないらしい」

キツネ馬の窓朝は同棲していた女に震災で死なれ、それから間もなく、焼け跡の東京にいても仕事がないというので、旅へ出たまま消息を絶っていた。

「死んじまったんじゃねえだろうな」

「あいつは大丈夫だよ。どうせまた、おかしな女に引っかかってるんだ。よくあることだが、旅先で見染められて養子かなんかにおさまってるのかもしれないねえ」

「でも、養子でおさまってるような野郎かい」

「だからいずれ帰ってくるさ。それより、馬楽さんのところはどうかだい」

「まあまあだな。とにかくこう不景気じゃ仕様がねえ。ほんとに売れてるのは小勝つあんくらいだ」

玉井長之助もよく芸名を変えるが、今度は小左楽から小助六になった。麴池元吉も師匠をうつるたびに改名してきたが、左楽門下で春風亭柳楽の名をもらい、黒柳吉之助も文治の門へうつって瀧川鯉之助から桂文都（ぶんと）に変わっていた。

しかし、みんな売れていなかった。当時は落語協会とか睦会とかいっても、現在のように組織としてかたまっていなかった。師弟の結びつきも薄く、いったん師匠と仰いだ人にどこまでもついていく者もいたが、売れる師匠につけば給金（ツクリ）もふえるし、いい席に出演して売り出す機会にもなるというので、つぎつぎに師匠を変える者が多かった。師匠連中がそうやってきたのだから、それで文句もでなかったのである。

だが、売れない者はどう足掻いても売れない。

「三語楼さんの協会は盛大じゃねえか。孝ちゃんもいいだろう」

延生が言った。

「いや、おれは駄目だ。三語楼師匠は売れている。金語楼も三亀松もばかな売れ方だ。でも、あとは小三治がいくらいで、どうもパツとしない。円生さんがあれだけうまくてもパツとしねえんだからな。おれなんか売れねえわけだ」

「まっとうな芸じゃいけねえってことか」

「分からねえ。世間のことも分からねえが、はなしのほうも分からなくなっちまった」

円喬や円右、小さんを引き合いにださなくても、三語楼や金語楼などの芸は邪道だった。邪道といわないまでも、薄っぺらな際物にすぎない。

孝蔵はそう思っていた。明治時代にステテコを踊って売れた円遊、あるいは電気踊りで沸かせた小南のように、彼らの人気は決して長つづきしないと思っていた。

しかし、現に金語楼たちが売れていることは確かで、孝蔵自身売りたいと思っていることも確かだった。甚語楼に改名したのも、今度こそという気持だった。金語楼が売れている一方では、桂文楽がきっかりした芸で売れっ子になっているのだ。

文楽は甚語楼より二つ年下である。

「もう一杯飲みてえな」

甚語楼が言った。

延生と飲んでいたのは電気ブランだった。小さなコップで一杯八銭、もちろん本物のブランデ